

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380951

研究課題名(和文) 初心者および中級者への継続的スーパーヴィジョンの効果とプロセスに関する実証的研究

研究課題名(英文) Supervision process to novice and intermediate level therapists

研究代表者

福島 哲夫 (Fukushima, Tetsuo)

大妻女子大学・人間関係学部・教授

研究者番号：60316916

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：心理療法のトレーニングに欠かせないスーパーヴィジョンのプロセスの中で初心者・中級セラピストはどのような経験をしているのかを、インタビュー調査・質問紙調査および実際のスーパーヴィジョン場面の動画分析によって明らかにした。

まず16名の初心者・中級者にインタビューを実施し、結果として「ヴァイザーや周囲の人が超自我のように感じる」「SVを活用できない」などの第一段階から「救われるSV」を体験できる第二段階へのプロセスが確認された。

また、さらに7名の初心者において「SVによる元気づけ」が体験されている一方で「ヴァイザーに振り回される」体験をしている初心者もいることが確かめられた。

研究成果の概要(英文)：In the process of clinical supervision (SV), what kind of experience novice and intermediate level therapists have? In this study, we examined 16 therapists and later 7 novice therapists, of their experience as supervisee.

We found that supervisee accept SV as 'super-ego' or 'can not fully utilize the SV' in the first step. Though in second step, they feel SV as 'being saved' experience. From 7 novice therapists, we found their SV experience as 'Cheer up' SV, but sometimes 'fully occupied with SV'.

研究分野：臨床心理学

キーワード：継続的スーパーヴィジョン 初心者・中級者セラピスト 感情コンピテンス 共有不全経験

1. 研究開始当初の背景

日本における心理療法のケース・スーパーヴィジョン(以下 SV)は、学派を超えて必須のものであるとされながらも、概念・体制ともに未整備なままである。とくに長期的な視点に立った継続的 SV に関しては、そのあるべき形と効果ともに不明確な部分が多い。

東山(1992)や倉光(2011)は初心者への SV と中級者への SV で求められることの違いを論じているが、経験則の域を脱していない。

さらに滝口ら(2001)は、学会でのシンポジウムを総括する形で SV について多角的な視点から考察しているが、シンポジスト間においても SV 概念の不一致があり、概念・体制ともに整備が求められる。さらに鐘(2004)は多面的な角度から内容面に踏み込んだ形で述べているものの、実証的研究には至っていない。

また Hess&Hess(1983)による SV 体制の調査を参考に、日本でも金沢(2011)が大学院での SV に関する調査を行っている。また、金沢・岩壁らは(金沢・岩壁,2006)以来継続して SV や SV と不可分の関係にある心理臨床家の職業的発達過程に関しても Skovholt & Rønnestad(1992,1995)をふまえて研究している。しかしながらこれらはすべて調査的研究が初心者への SV 研究にとどまっており、長期的視点を備えつつも具体的な臨床・SV データに即した研究はあまりされていない。

そこで、本研究では大学院修士課程 1 年次の試行カウンセリングへの SV から始めて、学内実習ケースへの SV、そしてさらに臨床経験 10 年程度までにわたる様々なヴァイザー(以下 Vee)とそのヴァイザー(以下 Vor)を対象にすべきと考えた。

このように短期・長期両方の視点から SV の内容面や目標、さらには Vor-Vee 関係を含めた SV への反応や主観的体験を実証的に探ることで、SV をはじめとする心理臨床家訓練のより効果的な在り方を具体的に模索する必要があると考えた。

2. 研究の目的

大学院修士課程 1 年目の大学院生による 3 大学院合同の試行カウンセリングへの SV、修士課程 2 年目の院生による学内実習ケースへの SV、さらには大学院修了後数年目の臨床心理士、修了後 5 年目前後の臨床心理士、10 年目前後の臨床心理士への継続的な SV を、短期・長期両方の視点から検証することによって、長期的具体的な視野で、心理臨床家の訓練と職業的発達に関するより有効な知見を得ることが主な目的である。

とくに SV 満足度、SV 作業同盟、カウンセラー効力感尺度、セラピスト(以下 Th)の感情コンピテンスの観点から、SV において何がなされて、それがどのような体験となっているかを明らかにする。また、短期的(ミクロ)な視点からは、Vor のどのような働きかけが、Vee の SV 満足度を高めたり、SV 作業同盟

を強めるのかを明らかにする。また、長期的な視点から Vor のどのような働きかけが Th 効力感や感情コンピテンスを高めるのかを明確化する。このような視点から SV の効果や問題点を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究 1.

<目的> 臨床心理士の技能の向上に果たす SV の影響を質的に明らかにする。

<調査対象者> 臨床心理士養成指定大学院臨床心理学専攻の院生 15 名(表 1) および経験年数 1 年~11 年の臨床心理士 16 名(表 2)

<手続き> 大学院生には 3 回の試行カウンセリング(他大学院生を相手に、本当の悩みを聴く)とその毎回の SV 体験についてインタビュー調査を実施した。臨床心理士には事前に大学院在学中の担当事例、臨床心理士資格取得後 1~2 年の担当事例、ここ最近 1~2 年の担当事例における体験と SV について想起してもらうよう調査用紙に記入を求めた。その後、2 時間程度、インタビュー調査を実施した。

<分析方法> グラウンデッド・セオリー・アプローチ(質的分析)

(2) 研究 2.

<目的> 臨床心理士養成のための初期教育のひとつである試行カウンセリングとその SV がもたらす効果を量的に明らかにする。

<方法> 研究 1 の対象者を含む大学生と臨床心理士 56 名に質問紙調査を行った。「カウンセラー感情コンピテンス尺度」鈴木(2014)、「カウンセラーの自己効力感」(上野・金沢 2011)、さらに「スーパーヴィジョン満足度尺度(SSQ)」、「ヴァイザーヴァイザー作業同盟尺度(SWA)」Efstation, Patton & Kardash(1990)への記入も求めた。

表 1. 対象者(大学院生)

No.	所属	学年	年齢
1	A大学院	修士1年	23
2	A大学院	修士1年	22
3	A大学院	修士1年	23
4	A大学院	修士1年	23
5	A大学院	修士1年	23
6	A大学院	修士1年	27
7	B大学院	修士2年	24
8	B大学院	修士2年	25
9	B大学院	修士1年	24
10	B大学院	修士1年	23
11	C大学院	修士1年	23
12	C大学院	修士1年	33
13	C大学院	修士1年	23
14	C大学院	修士1年	23
15	C大学院	修士1年	31

表 2 . 対象者 ( 臨床心理士 )

No.	経験年数	性別	主な職域
1	1年目	女性	教育
2	1年目	女性	福祉
3	2年目	女性	教育
4	3年目	女性	医療
5	3年目	女性	医療
6	6年目	女性	教育
7	6年目	女性	医療
8	6年目	男性	開業・教育
9	6年目	女性	開業・産業
10	7年目	女性	福祉
11	7年目	女性	福祉
12	7年目	男性	産業
13	8年目	女性	医療
14	8年目	女性	教育
15	8年目	女性	教育
16	11年目	女性	教育

(3) 研究 3 .

< 目的 > カウンセラーの抱く不全感や疲労感に関して、SV がどのような影響を持っているのかを質的に明らかにすることにより、より効果的な SV の在り方を探る。

< 方法 > 臨床心理士養成大学院に在籍している大学院生 4 名と、修了後、教育相談センターや児童関連施設に着任した 3 名を対象に、インタビュー調査を実施した。

4 . 研究成果

研究 1 . の結果、以下のようなことが明らかになった(図 1 . )。

「Th は初めは自信のない不安定な状態であるが、Th 自身の努力や CI や Vor との関わりを繰り返すことで、自身の感情に向き合ったり、CI との関係を深めることができるようになっていく。さらに Th は『救われる SV 』を体験し、『自身の感情に触れる』ことや、『CI との関係の深まり』、『CI との二者関係からの理解』を何度も経験することで、心理療法場面の展開を一まとめにした Th としてのコンピテンスが発達していく。しかし担当事例によっては、また不安で自信のない状態に戻ったりしながら、経験を積んでいく。

さらに、SV を受け続けることにより、自分自身のことや、自分の感情、自身の心理療法場面を俯瞰して眺める視点である心理療法場面へのメタ認知や、ネガティブな感情を受け入れるという感情に対する感情の変容、つまりメタ感情の変容によってコンピテンスの発達が促されると考えられ、いわゆる「臨床の知」(中村、1992) が形成される。」

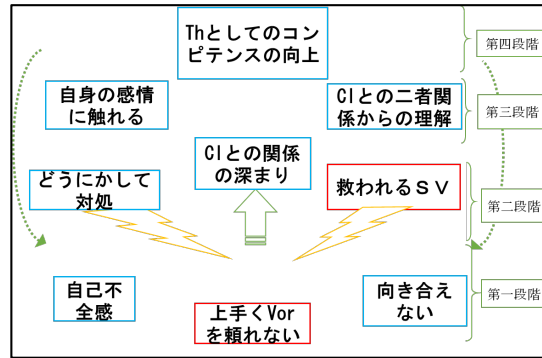


図 1 . 研究 1 . の結果図

研究 2 . の結果、以下のことが明らかになった。

SV を伴った臨床経験年数による共感性の変化を検討するため、感情コンピテンス尺度を分析対象とした。まず、感情コンピテンス尺度の因子分析を行った。その結果、既存の 8 因子ではなく、4 因子となった。そこで第 1 因子を「自分の感情に気づく能力」因子(  $r = .860$  )、第 2 因子を「他者の感情を識別し理解する能力」因子(  $r = .861$  )、第 3 因子を「内的主観的感情と外的感情表出を区別する能力」因子(  $r = .729$  )、第 4 因子を「嫌な感情や苦痛な状況に適応的に対処する能力」因子(  $r = .563$  )と命名した。次に、臨床経験 1 年未満の者と臨床経験 3 年前後～10 年の者の 2 群に分け、初心者と熟練者として感情コンピテンス尺度の変化が見られるかを検討するため t 検定を行った。

その結果、感情コンピテンス尺度全体の得点、感情コンピテンス尺度の第 1 因子得点、第 2 因子得点、第 3 因子得点において各 2 群間で有意な差がみられ、さらに、既存の感情コンピテンス尺度の共感性に関する下位項目得点において 2 群間で有意な差がみられた。よって、上記の各得点において、臨床経験 3 年前後から 10 年の者が臨床経験 1 年未満のカウンセラーの者よりも有意に高いことが明らかとなった。一方、感情コンピテンス尺度の第 4 因子得点において臨床経験 1 年未満の者と臨床経験 3 年前後から 10 年の者の 2 群間に有意な差は見られなかった。

研究 3 . の結果以下のようなことが明らかにされた。

質的分析の結果 5 カテゴリー が生成され、カウンセリング中には『共有経験』と『共有不全経験』のどちらとも経験されることがあり、カウンセリングが終わった直後には、カウンセリングの共有不全経験が変化していき『カウンセリング後の共有不全経験』が経験されることが明らかとなった。そしてカウンセリング後、共有不全経験で生じた不全感などに対して『不全感の解消や元気づけ』を行うことによって共有経験が得られるよ

う変化していくことが明らかとなった。しかし、『バイザーに振り回される』ことによつて共有経験も共有不全経験へと変化してしまう場合もありうるということが明らかとなった。これら 5 カテゴリーは一度経験されて終結するのではなく、何度も繰り返し行われるというように円環的なプロセスとして生じるものであった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 14 件)

福島哲夫(2016) カウンセラーのセルフケアと自己点検を どう進めるか? 臨床心理学 17(1), 87-89. (査読無し)

細谷祐未果・福島哲夫(2016) カウンセリング場面におけるカウンセラーの反射・バリデーション・肯定とクライアントの被共感体験・心理的距離との関連. 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要第 22 号 217-244. (査読あり)

岩壁茂 (2016). 臨床心理学・最新研究レポート: 微妙な偏見と差別 - マイクロアグレッションと治療同盟. 臨床心理学, 16, 247-251. (査読無し)

関口祥子・岩壁茂. (2016). セラピストの肯定介入に対するクライアントの主観的体験の検討. 臨床心理学, 16, 79-89. (査読あり)

久間(糟谷)寛子・藤岡勲・隅谷理子・福島哲夫・岩壁茂 (2016). セラピストによる肯定的発話の類型化. 臨床心理学, 16, 90-98. (査読あり)

Iwakabe, S., & Conceicao, N. (2015). Metatherapeutic processing as a change-based therapeutic immediacy task: Building an initial process model using a task-analytic research strategy. Journal of Psychotherapy Integration, 1-18. (査読あり)

Iwakabe, S. (2015). Case studies in Japan: Two methods, two world views. Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, 11, 65-80. (査読あり)

Iwakabe, S., & Enns, C. Z. (2015). Counselling and psychotherapy in Japan: Masako's story. In R. Moodley, M. Lengyell, R. Wu, & U. P. Gielen (Eds.), Handbook of counselling and psychotherapy in an international context. Routledge: New York. (査読無し)

Kanazawa, Y., Iwakabe, S. (2015). Learning and difficult experiences in graduate training in clinical psychology: A qualitative study of Japanese trainees' retrospective accounts. Counselling Psychology Quarterly, 1-24. (査読あり)

福島哲夫(2015) 触れあう = 「今ここ」での

関係. 臨床心理学 増刊第 7 号.48-52. (査読無し)

岩壁茂 (2015, 編集). カウンセリング・テクニック入門. 臨床心理学 増刊第 7 号. (査読無し)

岩壁茂 (2015). カウンセリング・テクニックの前提条件. カウンセリング・テクニック入門. 臨床心理学 増刊第 7 号, 20-27. (査読無し)

岩壁茂 (2015). 専門家としての成長・発展とは何か? 臨床心理学, 15, 695-699. (査読無し)

井田浩正・岩壁茂・中川和美・岡村達也. (2014). 若年労働者の転職志向と関連するパーソナリティ要因 - レジリエンス要因, 心理的健康要因についての検討. ストレス科学, 29, 293-307. (査読あり)

[学会発表](計 36 件)

Yamatsuta, K., Sugiyama, T., Ito, M., Shimizu, Y., Fukushima, T. (2016.7.24) What is psychological Healthy? 31st Meeting of International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.

Iwakabe, S. (2016, July 26th). Competencies in clinical psychology training: Exploring competencies in Japanese context. In Y. Kanazawa (Chair), The role of clinical psychology in Japan in the 21st century. A symposium conducted at the 31st Meeting of International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.

Iwakabe, S. (Chair, Discussant). (2016, July 26th). Healing relationship in psychotherapy: Attachment, the therapeutic alliance, and transformation. A symposium conducted at the 31st Meeting of International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.

Iwakabe, S. (Moderator). (2016, June 18th). Depression and Culture. A structural Discussion group conducted at the annual meeting of the Society for Psychotherapy Research, Jerusalem, Israel.

Iwakabe, S. (2016, June 18th). Discovery-oriented research and psychotherapy integration: Learning from Japanese clients and therapists. In C. Eubanks (Chair), Research on psychotherapy integration: Where we are and where we need to go. A semi-plenary conducted at the annual meeting of the Society for Psychotherapy Research, Jerusalem, Israel.

Nakamura, K., Iwakabe, S., & Fukushima, T. (2016, June 18th). Essential components of corrective emotional

- experience: A theory building case study. Paper presented at the annual meeting of the Society for Psychotherapy Research, Jerusalem, Israel.
- Nakamura, K., Iwakabe, S., & Fukushima, T. (2016 June 26th). Characteristics of corrective emotional experience in early sessions: A systematic case study of integrative affect-focused therapy. Poster presented at the annual meeting of Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, Dublin, Ireland.
- Noda, A., & Iwakabe, S. (2016, June 18<sup>th</sup>). The client experience of resolving unfinished business: A phenomenological case study. A panel conducted at the annual meeting of the Society for Psychotherapy Research, Jerusalem, Israel.
- Takabatake, Y., & Iwakabe, S. (2016 June 18th). The emotional impact of therapist's immediacy response: A systematic case study. Poster presented at the annual meeting of The Society for Exploration of Psychotherapy Integration, Dublin, Ireland.
- Yamaguchi, K., & Iwakabe, S. (2016, July 24th). How do female therapists experience becoming a mother? : A qualitative study on comparing their personal and professional change of two cases. A poster presented at the 31st Meeting of International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.
- Yamaguchi, K., & Iwakabe, S. (2016, July 24th). Emotion-focused therapy. In Itoh, Y. (Chair), New trend of person-centered and experiential approach in Japan. A symposium conducted at the 31st Meeting of International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.
- Yamasaki, Y., Iwakabe, S., & Fukushima, T. (2016, June 18th). Client relational experience in and out of therapy: How a client implements therapeutic experience into everyday life. A paper presented at the annual meeting of the Society for Psychotherapy Research, Jerusalem, Israel.
- 福島哲夫(2016.9.5). 臨床心理的支援の効果研究をめぐって. 研究推進事業委員会企画シンポジウム 日本心理臨床学会第 35 回大会. パシフィコ横浜
- 細谷祐未果・福島哲夫(2016.9.24). カウンセリング場面におけるカウンセラーの反射・バリデーション・肯定とクライアントの被共感体験・心理的距離との関連. 日本心理臨床学会第 35 回大会(ポスター発表)
- パシフィコ横浜
- 岩壁茂・上遠文恵・福島哲夫(2016.9.4.)感情と変容 - 面接場面の視聴を通して考える - . 日本心理臨床学会第 35 回大会自主企画シンポジウム. パシフィコ横浜
- 高島靖菜・中村香理・福島哲夫・岩壁茂(2016.9.5). 面接初期のクライアントの感情変容プロセスにおけるセラピストの即時性. 日本心理臨床学会第 35 回大会(口頭発表) パシフィコ横浜
- 岩壁茂(2016.9.5). (指定討論) 教育・研修委員会企画シンポジウム「大学院生の教育におけるスーパーヴァイザーの役割を考えるーライブスーパービジョンを素材として」 日本心理臨床学会第 35 回大会 . パシフィコ横浜
- 岩壁茂(2016.9.6). 心理臨床と質的研究 . 学会誌編集委員会委員会企画シンポジウム「心理臨床における質的研究をめぐって」日本心理臨床学会第 35 回大会 . パシフィコ横浜
- 野田亜由美・岩壁茂・福島哲夫・中村香理・高島靖菜・山崎和佳子・戸村徳子 (2016.9.6). 介入としての肯定に関するプロセス研究(2)ー3 事例における典型的肯定場面の比較検討ー, 日本心理臨床学会第 35 回大会論文集, 160. パシフィコ横浜
- 山崎和佳子・野村朋子・中村香理・高島靖菜・野田亜由美・長谷川かさね・森美和子・戸村徳子・岩壁茂・福島哲夫 (2016.9.6). 心理療法におけるクライアント変容プロセスの主観的体験ー治療関係の変化・セラピー内外をつなぐクライアントの行動に注目してー, 日本心理臨床学会第 35 回大会論文集, 186. パシフィコ横浜
- 中村香理・岩壁茂・野村朋子・戸村徳子・高島靖菜・山崎和佳子 (2016.9.6). セラピーにおける修正感情体験と日常生活における対人関係の変化 -The Core Conflictual Relationship Theme-Logically Unifiedを用いて-, 日本心理臨床学会第 35 回大会論文集, 187. パシフィコ横浜
- 高島靖菜・中村香理・福島哲夫・岩壁茂(2016.9.6). 面接初期のクライアントの感情変容プロセスにおけるセラピストの即時性ー系統的事例研究ー, 日本心理臨床学会第 35 回大会論文集, 188. パシフィコ横浜
- Iwakabe, S., Conceição, N., Nakamura, K., Nomura, T. (2015, June). Developing the research collaboration with clients: Does the nature of therapeutic relationship influence the nature of client participation in research? Paper presented at the Annual Meeting of The Society for Exploration of Psychotherapy Integration (SEPI), Baltimore, Maryland.

- Nakamura, K., & Iwakabe, S. (2015). A task analytic study of corrective emotional experience: An initial model building from a pure gold sample. Poster presented at the annual meeting of Society for Psychotherapy Research, Philadelphia, USA.
- Nakamura, K., Iwakabe, S., & Fukushima, T. (2015). Corrective emotional experience over time: A systematic case study of integrative affect-focused therapy with a middle-aged woman with depression. Poster presented at the annual meeting of Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, Baltimore, USA.
- Rodrigues, P., Conceição, N., Iwakabe, S., & Gleiser, K. (2015, June). Voicing an AEDP supervision process: A case study on supervision session change processes and how it likely spread to and affected the researchers/clinicians/clients involved. Paper presented at the Annual Meeting of The Society for Exploration of Psychotherapy Integration (SEPI), Baltimore, Maryland.
- 鈴木理絵・福島哲夫(2015.9.20) . 心理療法場面におけるセラピストの感情コンピテンスの発達過程 . 日本心理臨床学会第 34 回大会(ポスター発表)神戸国際会議場
- 樽澤百合・福島哲夫(2015.9.20) . カウンセリング場面における聴き手の傾き量が話し手に与える影響に関する実験研究-知覚された共感性、快感情、心理的距離に注目して . 日本心理臨床学会第 34 回大会(ポスター発表) 神戸国際会議場
- 野村朋子・岩壁茂 (2015.9.20). 心理臨床家自身の心理療法に関する質的研究 - その理由・体験・影響に焦点を当てて -, 日本心理臨床学会第 34 回大会論文集, 254. 神戸国際会議場
- 中村香理・岩壁茂 (2014.8.20) . 修正感情体験に関する質的研究 第三者視点からの特徴や要素の検討 , 日本心理臨床学会第 33 回大会論文集 , 79 . パシフィコ横浜
- Sekiguchi, S., Fukushima, T. & Iwakabe, S. (2014, June). Client's subjective experiences of therapist affirmation in psychotherapy. Poster presented at the 45<sup>th</sup> annual meeting of The Society for Psychotherapy Research, Copenhagen, Denmark.
- Conceicao, N., & Iwakabe, S. (2014, June). Therapist self-disclosure and therapist transformation: A qualitative study on AEDP therapists working with immediate experience. Paper presented at the 45<sup>th</sup> annual meeting of The Society for Psychotherapy Research, Copenhagen, Denmark.
- Silva, A., Conceicao, N., & Iwakabe, S. (2014, June). In-session change processes and out-session change mechanisms in Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy: A qualitative study on the perspective of current clients. Paper presented at the 45<sup>th</sup> annual meeting of The Society for Psychotherapy Research, Copenhagen, Denmark.
- Conceicao, N., Iwakabe, S., Rodrigues, P., Silva, A., & Ferreira, R. (2014, April). Clients' perspectives of out session change mechanisms in AEDP: A qualitative study about the translation of in-session change into daily life's change. Paper presented at the annual meeting of The Society for Exploration of Psychotherapy Integration, Montreal, Canada.
- Iwakabe, S., Conceicao, N., & Fosha, D. (2014, April). A phenomenological study on the client experience of change in AEDP. Paper presented at the annual meeting of The Society for Exploration of Psychotherapy Integration, Montreal, Canada.
- Nakamura, K., Iwakabe, S., Fosha, D., & Conceicao, N. (2014, April). Delineating components of corrective emotional experience in AEDP: A qualitative study. Poster presented at the annual meeting of Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, Montreal, Canada.
- 〔図書〕(計 2 件)  
 福島哲夫・古田雅明・岩壁茂・藤岡勲・八城薫・杉山崇・足立英彦(2016). 臨床現場で役立つ質的研究法. (編著)172頁 新曜社  
 杉山崇・越智啓太・丹藤克也・福島哲夫(2015). 記憶心理学と臨床心理学のコラボレーション. (第 10 章担当執筆)pp. 164-181 北大路書房
- 6 . 研究組織  
 (1)研究代表者  
 福島 哲夫 (Fukushima Tetsuo)  
 研究者番号 : 60316916  
 大妻女子大学・人間関係学部・教授  
 (2)研究分担者  
 岩壁 茂 (Iwakabe Shigeru)  
 研究者番号 : 10326522  
 お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授